

# キャラクターのタイプと役割語に関する意識調査報告

## —〈私たち〉タイプに注目して—

宿 利 由希子

キーワード: 日本語母語話者、日本語学習者、発話キャラクター、マッチング、イラスト

### 要 旨

本稿では、日本語母語話者(以下、母語話者)および日本語学習者(以下、学習者)を対象に、現代日本語現実世界に見られる役割語に関する意識調査を行った。調査では、発話者であるキャラクターのイラストを提示し、そのイメージを問い、役割語とマッチングさせた。調査の結果、学習者はいくつかのキャラクターに関して母語話者と共通またはそれに近いイメージを持っていても、役割語を母語話者のように組み合わせることができないことが明らかになった。

### 1. 研究の目的

学習者から「『おれ』はだれが使うことばか」「漫画では女が『はく』と使っていたが、それは正しいのか」といった質問を受けることがある。これは、漫画などのフィクション作品の世界ではなく、現代日本語現実世界でどのような人がどのような言葉づかいで話すのかという質問である。このような質問に対し、教師は、個人的見解ではなく母語話者の共通認識を提供することが望ましいだろう。

金水(2003)は、ある特定の人物像と結びついた言葉づかいを「役割語」として、以下のように定義している。

ある特定の言葉遣い(語彙・語法・言い回し・イントネーション等)を聞くと特定の人物像(年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等)を思い浮かべることができるとき、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉遣いを思い浮かべることができるとき、その言葉遣いを「役割語」と呼ぶ。(金水, 2003, p. 205)

また定延(2006:2011)は、役割語によって暗に示される発話動作の行い手として

の人物像を「発話キャラクタ」と定義している。さらに、2-1で詳しく述べるが、発話キャラクタは、老人、男性、女性など、現在の日本社会に含まれる人物像である<現代日本語(共通語)社会の住人>タイプ(以下、<私たち>タイプ)と、外国人、過去の時代の人、人でないものなど、現代の日本人でない存在である「自由にでっち上げられる外部世界の住人」(以下、<異人>タイプ)とに二分できる(定延, 2011, p. 127)。<私たち>タイプが「びっしり稠密に」存在するのに対して、<異人>タイプはポツンポツンと散発的にしか存在しない(定延, 2011, p. 128)。

現在、役割語研究は様々な方面に広がりを見せているが、<異人>タイプの発話キャラクタが話す役割語(以下、<異人>タイプの役割語)を対象としているものがほとんどである(ガウバツツ, 2007; 山口, 2007; 金田, 2011)。

そこで本研究は、<私たち>タイプの発話キャラクタが話す役割語(以下、<私たち>タイプの役割語)に注目する。母語話者と学習者の、<私たち>タイプの役割語を話すキャラクタに対するイメージと、そのキャラクタと役割語に関する認識に差があるかどうかを検証し、学習者がこのような言葉づかいのヴァリエーションを理解する手助けとなる基礎資料を作ることを本研究の目的とする。

## 2. 先行研究と本研究の位置づけ

### 2-1. 対象とする<私たち>タイプ

先行研究を参考に「役割語-発話キャラクタ-発話者」の関係とキャラクタを分類し、表1に示す。

発話キャラクタと役割語は、<私たち>タイプと<異人>タイプに分類できる。例えば、或る若者が「本来」的に<若者>っぽくしゃべりながら、時に遊びの文脈などで「臨時」的に<女>っぽくしゃべる場合、<若者>は「本来」的に発動され、<女>は別人(例えば、或る女や、複合的なキャラクタ、おかま)には「本来」的に発動され得るため、<私たち>タイプに分類できる(定延, 2011, p. 164)。前者は発話キャラクタと発話者の「本来」の属性が一致しており、後者は一致していないが、どちらも<私たち>タイプに分類する。

<異人>タイプの例として「自分は～であります」のような<<兵隊>ことば>を挙げる。兵隊は普通戦闘場面に限り登場し、場面と一体化しているため、発話者の兵隊は、発話キャラクタ<兵隊>を「臨時」的に発動し、四六時中それで通すことはない(金水他, 2008, p. 210)。また、<<兵隊>ことば>を話す若者も、遊びや引用などの文

表1 「役割語-発話キャラクター-発話者」の関係とキャラクターの分類

観察される世界	フィクション世界および現実世界				フィクション 世界のみ
発話キャラクター	《私たち》タイプ		《異人》タイプ		
発話キャラクター の発動のされ方	「本来」的に発動 (され得る)		「臨時」的に発動		「本来」的に 発動
発話キャラクターと 発話者の本来の属性	一致	不一致	一致	不一致	一致
発話キャラクター	若者	女	兵隊	兵隊	ネコ
役割語	若者ことば	女ことば	兵隊 ことば	兵隊 ことば	ネコ語
発話者	若者	男	兵隊	若者	ネコ
キャラクター	若者	おかま	兵隊	若者	ネコ

脈で「臨時」的に《兵隊》を発動する。発話キャラクターと発話者の「本来」の属性が一致するものもしないものも《異人》タイプに分類できる<sup>1)</sup>。

本研究では、《私たち》タイプの役割語およびその話者であるキャラクターを対象として扱うこととする。これは、先程の分類における《若者》や《女》などの発話キャラクターを発動させるキャラクターであり、発話キャラクターと発話者の「本来」の属性が一致するものとし、ないものの両方を対象とする。

## 2-2. 調査内容

本研究は、「とりあえず「すべてのことばは役割語である」と考えてみた方がよさそうではないか」という定延(2011, p. 84)の提案に基づき調査内容を設定した。

役割語を考える上で最も重要な指標となるものは人称代名詞またはそれに代わる表現(以下、自称詞)と、文末表現であるという金水(2003, p. 205)の指摘に倣い、注目する役割語の要素は自称詞と文末表現に限ることとした。発話場面に関しては、仕事中同僚や先輩に対して発話するフォーマル場面と、仕事以外の時間に友人に対して発話するカジュアル場面の2つに分けた。判定者を交えての選別作業の結果、最終的に選別された役割語は、男性自称詞5種、女性自称詞5種、文末表現8種、キャラクターは男性キャラクター5種、女性キャラクター5種である。

### 3. 調査概要

#### 3-1. 調査期間と対象者

調査は、2011年8月から10月にかけて、宮城県に住む20～60代の母語話者と、同じく宮城県に住む中級以上の学習者を対象に質問紙を用いて実施した。母語話者は東北地方出身者が87名、東北地方以外出身者が16名、計103名であり、学習者は中国出身者が69名、韓国出身者が14名、その他19名の計102名であった。

また、学習者で調査対象者の割合の高かった中国人学習者のうち2名を対象に半構造化インタビューも行った。半構造化インタビューでは、質問紙に答えてもらいながら、その回答の理由を筆者がその都度尋ねた。学習者の在日歴とレベル<sup>2</sup>を表2に、半構造化インタビューの対象者に関する情報を表3に示す。

表2 学習者対象者の在日歴とレベル

レベル	在日歴				合計 (%)
	1年未満	1年以上 2年未満	2年以上 5年未満	5年以上	
上級	7	3	16	18	44 (43.1%)
中級	6	10	8	3	27 (26.5%)
不明	10	11	5	5	31 (30.4%)
合計	23(22.5%)	24(23.5%)	29(28.4%)	26(25.5%)	102 (100.0%)

数字は人数、( )は有効パーセント。

表3 学習者半構造化インタビュー対象者

性別	年齢	身分	出身地	在日歴	日本語学習歴	日本語能力試験
男	20代	東北大学 経済学部生	中国	2年	6年6か月	旧1級
女	20代	東北大学 文学部研究生	中国	1年 10か月	4年10か月	未受験

#### 3-2. 調査票内容

質問紙では、まずキャラクタのイメージを活性化させ、意図的にバイアスをかけるため、イラストとキャラクタの名称のマッチングを行った。各イラストにふさわしいと思うキャラクタの名称を1つずつ男女キャラクタ別に選んでもらう形式をとった。

さらに、各イラストに対するイメージを聞く質問として、イラストごとに14項目の評価語対を提示し、5段階で評価させた。評価語対は、井上(1989)、鄭(2005)、町他(2006)などの言語意識調査、および伊師他(2006)などの外面的印象に関する調査で使われた評価語対を参考に、「子供っぽい-子供っぽくない」「男性的な-女性的な」「礼儀正しい-礼儀正しくない」「上品な-下品な」「頭が良さそうな-頭が悪そうな」「仕事ができそうな-仕事ができそうにない」「個性的な-個性的でない」「明るい-暗い」「冷静な-落ち着きのない」「わがままな-思いやりのある」「軽薄な-かたい」「力強い-ひ弱な」「計算高い-計算高くない」「上下関係に厳しい-上下関係に厳しくない」の計14項目を設定した。

続いて、各イラストにふさわしいと思う自称詞・文末表現を1つずつ男女キャラクター別にマッチングさせた。男性自称詞は「わたし」「ほく」「おれ」「自分」を対象とし、「ほく」については「ほ」にアクセントの核がある頭高型(以下、「ほくA」と)、平板型(以下、「ほくB」)に分けた。女性自称詞は「わたし」「あたし」「うち」「自分」「名前」の5つとし、「名前」は「まゆみ」を採用した。男女別に、フォーマル場面における発話「○○、行きます」の○○の部分に、またカジュアル場面における発話「○○、行く」の○○の部分にふさわしいと思う自称詞を選ばせた。

文末表現はフォーマル場面で使用するフォーマル文末表現とカジュアル場面で使用するカジュアル文末表現に分けた。フォーマル文末表現は「～じゃありませんか?」「～じゃありません?」「～じゃないですか?」「～じゃないっすか?」の4つである。カジュアル文末表現は「～じゃない?」「～じゃないか?」「～じゃね?」を対象とし、「～じゃない?」は、「な」にアクセントの核があり、最終拍「い」に上昇イントネーションがかかる「昇調1(国立国語研究所, 1960, p. 7)」の音調(以下、「～じゃない?A」と)、「じゃない」のアクセント核を消失し、最終拍「い」に上昇イントネーションがかかる「浮き上がり調(川上, 1963)」(以下、「～じゃない?B」)に分けた。それぞれの場面において、「あれ、小野さん○○?」の○○の部分にふさわしいと思う文末表現を選ばせた。

調査に際し、マッチングでは、すべての選択肢をどれか1つとつなぐよう強制判断させた。また、アクセントとイントネーションの扱いについて、声質や声色などが影響し対象者が従来とは異なるイメージを持つことがないよう、福島他(2007)に倣い、録音データを用いず、対象者自身に発音してもらう方法を採用した。

### 3-3. 調査結果予想

予備調査の結果から、筆者が予想した調査結果を表4に示す。なお、文末表現に関しては、予備調査で回答にばらつきの見られた「お坊ちゃん系」と「ぶりっこ系」キャラクタを抜き、男性キャラクタ4種、女性キャラクタ4種とした。

表4 予備調査の結果から予想した結果（男性キャラクタ）

キャラクタ	キャラクタ の名称	自称詞		文末表現	
		フォーマル	カジュアル	フォーマル	カジュアル
男性 1	 新卒社員系	ぼく B	ぼく B	じゃありませんか？	じゃない？B
男性 2	 体育会系（男）	自分	自分	じゃないですか？	じゃないか？
男性 3	 ホスト系	おれ	おれ	じゃないっすか？	じゃね？
男性 4	 お坊ちゃん系	ぼく A	ぼく A	-	-
男性 5	 おかま系	わたし	わたし	じゃありません？	じゃない？A
女性 1	 キャリア ウーマン系	わたし	わたし	じゃありませんか？	じゃない？A
女性 2	 体育会系（女）	自分	自分	じゃないですか？	じゃないか？
女性 3	 元気 ぼっちゃり系	あたし	あたし	じゃありません？	じゃない？B
女性 4	 ぶりっこ系	まゆみ	まゆみ	-	-
女性 5	 ギャル系	うち	うち	じゃないっすか？	じゃね？

## 4. 結果

### 4-1. キャラクタのイメージ

各キャラクタのイラストに対するイメージ調査の結果、学習者は「ぶりっこ系」キャラクタ以外のキャラクタに対し、母語話者と共通またはそれに近いイメージを持っていることがわかった。例として「新卒社員系」キャラクタの結果を図1に、「ぶりっこ系」キャラクタの結果を図2に示す。

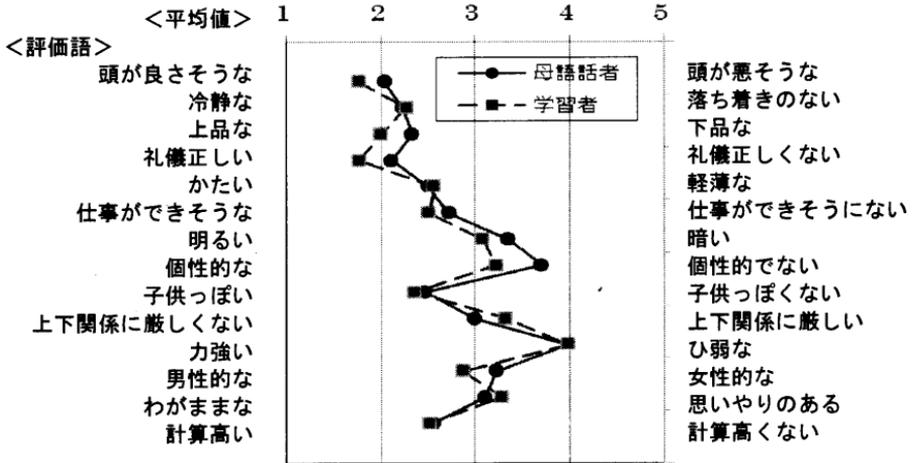


図1 「新卒社員系」キャラクタのイメージ比較

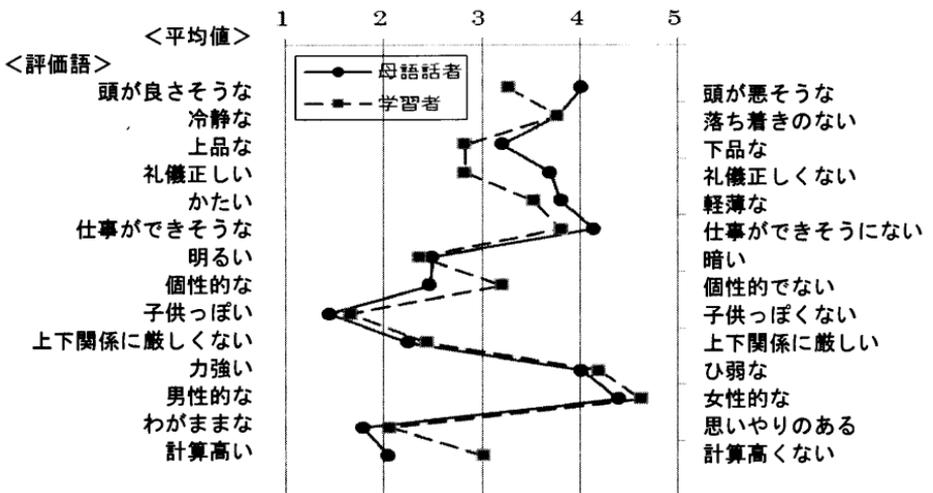


図2 「ぶりっこ系」キャラクタのイメージ比較

「新卒社員系」キャラクターに関しては、母語話者、学習者ともに、「頭が良さそうな」「冷静な」「上品な」「礼儀正しい」「子供っぽい」「ひ弱」「計算高い」などのイメージを持っていることがわかる。また、ほぼ同じような折れ線を描いていることから、両者の回答にさほど差がないことがわかる。

「ぶりっこ系」キャラクターに関して、母語話者が「頭が悪そうな」「下品な」「礼儀正しくない」「わがままな」「計算高い」などのイメージを持っているのに対し、学習者はそれほどのマイナス評価をしていない。半構造化インタビューから、メディアなどから伝えられる日本人女性像にそもそも「ぶりっこ系」の女性が多く、そのような女性は人気があると思っていることがわかった。

それ以外のキャラクターに関しては、項目によって若干の差は見られたが、両者の間で全く異なるイメージを持つような例は見られなかった。

#### 4-2. キャラクターと役割語のマッチング

イラストと役割語のマッチングに関する意識調査の結果、母語話者は、男性自称詞「ほくA」「ほくB」など回答にばらつきが出たものもあったが、予想した結果とほぼ同様の回答をした。また、学習者は、「ホスト系」キャラクターに母語話者と同様のイメージを持ち、役割語を母語話者のように組み合わせることができるが、「ぶりっこ系」には母語話者とやや異なるイメージを持ち、役割語を母語話者のようには組み合わせられないことがわかった。さらに、学習者は、その他のキャラクターに母語話者と共通またはそれに近いイメージを持っていても、役割語を母語話者のように組み合わせられないことが明らかになった。例として、男性キャラクターの自称詞の細かいマッチングデータを表5に、文末表現データを表6に示す。

母語話者と学習者の結果に最も大きな差が見られたのは男性自称詞であった。予想した結果との一致率が、母語話者はフォーマル場面で25.2%、カジュアル場面で26.2%であったのに対し、学習者はどちらの場面でも2.0%であった。「新卒社員系」と「お坊ちゃん系」キャラクターについて、「ほくA」と「ほくB」の入れ替わりが見られたため、どちらかを書いていれば一致したとして、もう一度分析した。その結果、母語話者の一致率はフォーマル場面で61.2%、カジュアル場面で64.1%になったのに対し、学習者はどちらの場面でも7.8%であった。両場面において予想と全問一致した学習者は、男性5名(62.5%)、女性3名(37.5%)で、出身地は韓国3名、中国、台湾、インドネシア、ポーランド、ロシア1名ずつであり、在日歴、学習歴、レベルなどに統一性はなかった。

表5 男性キャラクタと男性自称詞マッチング (カジュアル場面)

自称詞		男性キャラクタ				
		新卒社員系	体育会系	ホスト系	お坊ちゃん系	おかま系
わたし	母	7 (6.8%)	3 (2.9%)	1 (1.0%)	5 (4.9%)	87 (84.5%)
	学	39 (38.2%)	5 (4.9%)	3 (2.9%)	19 (18.6%)	36 (35.3%)
ぼく A	母	55 (53.4%)	0 (0.0%)	3 (2.9%)	45 (43.7%)	0 (0.0%)
	学	30 (29.4%)	36 (35.3%)	11 (10.8%)	16 (15.7%)	8 (7.8%)
ぼく B	母	37 (35.9%)	2 (1.9%)	6 (5.8%)	49 (47.6%)	9 (8.7%)
	学	14 (13.7%)	19 (18.6%)	10 (9.8%)	31 (30.4%)	27 (26.5%)
おれ	母	2 (1.9%)	20 (19.4%)	75 (72.8%)	2 (1.9%)	4 (3.9%)
	学	4 (3.9%)	19 (18.6%)	72 (70.9%)	3 (2.9%)	6 (5.9%)
自分	母	2 (1.9%)	78 (75.7%)	18 (17.5%)	2 (1.9%)	3 (2.9%)
	学	14 (13.7%)	25 (24.5%)	5 (4.9%)	32 (31.4%)	25 (24.5%)
合計	母	103 (100%)	103 (100%)	103 (100%)	103 (100%)	103 (100%)
	学	101 (100%)	101 (100%)	101 (100%)	101 (100%)	102 (100%)

表6 男性キャラクタとフォーマル文末表現マッチング

フォーマル文末表現		男性キャラクタ			
		新卒社員系	体育会系	ホスト系	おかま系
じゃあり ませんか?	母	68 (66.0%)	20 (19.4%)	3 (2.9%)	12 (11.7%)
	学	62 (60.8%)	23 (22.5%)	4 (3.9%)	13 (12.7%)
じゃあり ません?	母	11 (10.7%)	6 (5.8%)	2 (1.9%)	84 (81.6%)
	学	20 (19.6%)	28 (27.5%)	8 (7.8%)	46 (45.1%)
じゃない ですか?	母	24 (23.3%)	66 (64.1%)	8 (7.8%)	5 (4.9%)
	学	19 (18.6%)	45 (44.1%)	17 (16.7%)	21 (20.6%)
じゃない っすか?	母	0 (0.0%)	11 (10.7%)	90 (87.4%)	2 (1.9%)
	学	1 (1.0%)	6 (5.9%)	73 (71.6%)	22 (21.6%)
合計	母	103 (100%)	103 (100%)	103 (100%)	103 (100%)
	学	102 (100.0%)	102 (100.0%)	102 (100.0%)	102 (100.0%)

表5、6 どちらも、母=母語話者、学=学習者、数字は人数、( )は有効パーセント。

キャラクターごとに見ると、「ホスト系」キャラクターに関しては、自称詞、文末表現のどちらにおいても母語話者と学習者の結果に大きな差はなく、予想した結果との一致率は高かった。その他、「キャリアウーマン系」キャラクターと「わたし」「～じゃありませんか?」、「ギャル系」キャラクターと「～じゃないっすか?」「～じゃね?」のマッチングに関しても、母語話者、学習者ともに高い一致率を示した。

## 5. 考察とまとめ

### 5-1. 考察

以上の結果から、学習者がキャラクターと役割語を組み合わせる際、そのキャラクターが「丁寧に話しそうかどうか」、その役割語が「丁寧か丁寧でないか」という観点を指標としていることが推察された。

学習者は「上品」で「礼儀正しい」と評価した「新卒社員系」は丁寧に話しそうなので、丁寧そうな自称詞「わたし」や丁寧そうなフォーマル文末表現「～じゃありませんか?」を組み合わせている。反対に、丁寧でない言葉づかいで話しそうな「ホスト系」キャラクターに、丁寧でなさそうな「おれ」や「～じゃないっすか?」「～じゃね?」を組み合わせた。半構造化インタビューでも、「ホスト系」キャラクターに対して「学歴が低そうなので、話す言葉は礼儀がないと思う」というコメントを得た。一方、「丁寧に話しそうかどうか」の観点では説明できないキャラクターに関しては、特定の役割語と組み合わせていなかった。

役割語に注目すると、母語話者と学習者の結果に一番大きな差が見られたのは男性自称詞であった。これは、男性自称詞「わたし」のマッチングが原因となっていると考えられる。男性自称詞「わたし」に、母語話者の多くが「おかま系」キャラクターを組み合わせたのに対し、学習者は「おかま系」だけでなく「新卒社員系」や「お坊ちゃん系」にも多く当てている。ここから、男性自称詞「わたし」を単純に丁寧な自称詞として認識している学習者がいることが伺える。また、学習者は男性自称詞「おれ」については、丁寧でない言葉づかいであると認識しているようだが、それ以外の「ほくA」「ほくB」「自分」については、特定のイメージを持っていないようである。これも、結果に大きな差が見られた原因だと考えられる。半構造化インタビューでは、「おれ(俺)」は中国では田舎者が使う言葉なのであまりイメージが良くない」というコメントを得た。一方、「ほくA」「ほくB」「自分」については、「だれがいつ使うのかよくわからな

い]との回答を得た。

さらに、これらの結果と、学習者の出身地や在日歴、日本語学習歴などとの関連は低かった。このことから、在日歴や学習歴が長いまたは日本語レベルが高い場合でも、母語話者のようにマッチングできるわけではないことがわかる。

## 5-2. まとめと今後の課題

本研究では、学習者が<私たち>タイプの役割語のヴァリエーションを理解する手助けとなる基礎資料を作るため、<私たち>タイプの役割語とその発話者であるキャラクタに関して、母語話者と学習者の認識に差があるかどうかを検証した。その結果、学習者はいくつかのキャラクタに関して母語話者と共通またはそれに近いイメージを持っていても、役割語を母語話者のように組み合わせることができないことが明らかになった。また、この結果から、学習者は「キャラクタ-役割語」の関係を「丁寧に話しそうなキャラクタか」「丁寧な役割語か」という指標から判断する傾向が見られた。

これは、これまでの日本語教育が「丁寧か丁寧でないか」に注目し、また「丁寧な言葉づかい=無標」とする指導を行ってきたということをも示しているのではないだろうか。例えば、「わたし」という自称詞は、日本語教育では初級のはじめの段階で、男性学習者と女性学習者に同じように導入される。丁寧な自称詞であり、だれでもどこでも使える無標の自称詞のようである。しかし、本研究で母語話者に選ばれた「わたし」の使用男性キャラクタは、非常に個性的なキャラクタであった。つまり、丁寧な言葉づかいも有標になり得るということである。

このことを踏まえ、日本語教育現場の人間が「丁寧な言葉づかいだからといって、どのようなキャラクタが使っても問題ないのか」という疑問を持つことが重要であると筆者は考える。

なお、本研究の目的は、「このような人物は必ずこのように話すものだ」という意識を学習者に刷り込むことでも、「このような人物はこのように話さなければならない」と学習者に言葉づかいを強制することでもない。本研究の結果を、「このような言葉づかいで話すと、このような人物だと思われる可能性がある」という、学習者が自称詞や文末表現のヴァリエーションの中から1つを選択する際の判断材料と考えていただければ幸いである。

## 注

- <sup>1</sup> その他、小説や漫画、歌などのフィクション作品、インターネット上のコメントやブログ、太田(2011)のよいうな「日本語を話さない発話者がもし日本語で発話したら」といったフィクション世界でのみ観察されるものは、すべて<異人>タイプとする。
- <sup>2</sup> レベルは上級=日本語能力試験N1、旧1級合格、中級=N2・3・4・5、旧2・3・4級合格、不明=未受験。

## 参考文献

- 福島和郎・岩崎庸男・渋谷昌三(2007)「終助詞“よ”と“ね”の発話から聞き手が推測する話し手との人間関係」『目白大学心理学研究』3, pp. 109 - 119.
- ガウバッツ, T. M. (2007)「小説における米語方言の日本語訳について」金水敏(編)『役割語研究の地平』くろしお出版, pp. 125 - 158.
- 井上史雄(1989)『言葉づかいの新風景(敬語と方言)』秋山書店.
- 伊師華江・作田由衣子・中原幸枝・赤松茂・行場次朗(2006)「印象変換ベクトル法による顔の高次印象合成法の心理学的評価」『電子情報通信学会技術研究報告, HIP, ヒューマン情報処理』106(610), pp. 7 - 12.
- 鄭惠先(2005)「日本語と韓国語の役割語の対照-対訳作品から見る翻訳上の問題を中心に-」『社会言語科学』8(1), pp. 82 - 92.
- 金田純平(2011)「要素に注目した役割語対照研究-「キャラ語尾」は通言語的なりうるか-」金水敏(編)『役割語研究の展開』くろしお出版, pp. 127 - 152.
- 川上夔(1963)「文末などの上昇調について」『国語研究』16, pp. 25 - 46.
- 金水敏(2003)『ヴァーチャル日本語役割語の謎』岩波書店.
- 金水敏・乾善彦・渋谷勝己(2008)『シリーズ日本語史4 日本語史のインターフェース』岩波書店.
- 国立国語研究所(1960)『話しことばの文型(1)-対話資料による研究-』.
- 町一誠・樋口匡貴・深田博己(2006)「話し方の方言使用と印象:コードスイッチの適切さと聞き手の出身地による影響」『社会心理学研究』21(3), pp. 173 - 186.
- 太田真希恵(2011)「ウサイン・ボルトの“T”は、なぜ「オレ」と訳されるのか-スポーツ放送の「役割語」-」金水敏(編)『役割語研究の展開』くろしお出版, pp. 93 - 125.
- 定延利之(2006)「ことばと発話キャラクタ」『文学』7-6, pp. 117 - 129.
- (2011)『日本語のぞきキャラくり』三省堂.
- 山口治彦(2007)「役割語の個性性と普遍性-日英の対照を通して-」金水敏(編)『役割語研究の地平』くろしお出版, pp. 9 - 25.